ISSN 1342-4866

山形大学附属博物館報32

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　2006. 3

目　次

ユニヴァーシティ・ミュージアム・エクスポとは …… 元木幸一（1）
博物館雑感 …… 森谷圓人（2）
博物館ボランティア Information Desk …… （3）
資料紹介 ― 藁沓 ― …… （4）
平成17年度事業報告 …… （6）

ユニヴァーシティ・ミュージアム・エクスポとは？

元木幸一（附属博物館館長）

「ユニヴァーシティ・ミュージアム・エクスポ」とは、何であろう。何を隠そう。わが山形大学附属博物館が今年11～12月に参加する、万博に匹敵するかもしれない、大イヴェントなのである。場所は上野の山、東京芸術大学大学美術館（以下面倒なので「芸大美術館」という）。上野の山といえば、西洋美術館、東京国立博物館、東京都美術館といったそうそうたる大美術館が軒を並べ（というほどくっついてはいないが）、その中で、芸大美術館は大学附属美術館とは思えない程、大美術館に伍して競い合っている大学博物館の星といってよい美術館なのである。入館料も、それら大美術館と同じように立派にとる。「興福寺国宝展」なんて1300円も喜捨させられた。

その立派な美術館に、わが山形大学附属博物館の収蔵品が展示されることになったのである。

さて遅いかもしれないけど、白状しよう。「ユニヴァーシティ・ミュージアム・エクスポ」というのは私が勝手につけた仮称である。要するに国立大学博物館等協議会という組織があり、そこと芸大美術館の主催で、全国の国立大学附属博物館のお宝持ち寄り展覧会を開催するのだ。

国立大学博物館ってそんなにあるの？という疑問がわくだろう。きちんとした容れ物があるもの、ないもの、その形態、レベルはさまざまなれど、同協議会に参加しているのは36大学もあるのだ。さすがにあの東京大学総合研究博物館は建物も資料もスタッフも充実しているが、意外な大学に（失礼！）誠に立派な博物館があったりするのだ。例えば、東京農工大学工学部附属繊維博物館。旧本部だった古い洋館には、繊維関係なら、豊田、日産などの古い織機、養蚕関係の道具などから、江戸時代の織物に関係する浮世絵まで、実に多彩な分野からの収集品があるのだ。

それでは、わが山形大学附属博物館には、どんなお宝があるんだろう。よそ様に見せても恥ずかしくない、価値ある物なんてあるんだろうか、とお思いかもしれない。それには自信を持ってお答えしよう。「沢山あるよ～」と。生物標本には、種等を同定する基準となる唯一の標本である完模式標本もいくつか（サンリンガエル等）あるし、考古資料は県の重要文化財に指定された土器が200点近くある。歴史資料も古文書はもちろんのこと、隠れキリシタンの十字架、お菓子の型などといった珍しい生活資料なども多数あるのである。

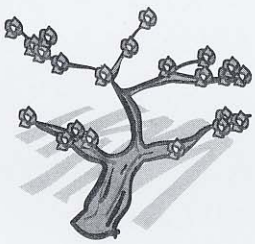
その中で何を出品しようかと迷うわけだが、近年の本館が一番熱心に取り組んでいる調査研究を発表するのがふさわしいように思う。それは、美術資料ということになるだろう。特に、昨年度小展覧会で報告した椿貞雄《菊子遊戯之図》とそれに関する科学調査を展示するのが、大学博物館らしくて良いのではないかと思い、主催館の芸大美術館の学芸員に相談すると、賛意を表してくれた。国立大学博物館の多くは理系の博物館である。したがって美術資料を持っている館は意外に少ないのである。

実は、それまで内心忸怩たるものを感じていた。というのは、主催館である芸大は、わが国の美術をリードして来た教育機関であり、卒業生には大芸術家が山のようにいる。したがって、誇張でなく、卒業作品を集めただけでも近代日本美術史を辿ることができるほどなのである。そのような芸大美術館にウチの美術コレクションを出品しても見劣りしないのだろうか、とやや心細い気持ちだったのである。まあ、劣等感という奴ですな。

それが先の芸大の学芸員氏の言葉で吹っ切れた。ウチの身の丈に合う物を出すしかないという居直りがあり、最近ウチがやっている調査研究を広く知ってもらう絶好の機会を逃すべきではないという野心が続き、これを機会に近代日本美術研究の進展に少しでも寄与できるかもしれないという—やや奇麗ごとだが—期待が生まれた。

かくて11～12月には、わが山形大学附属美術館—いや博物館でした—の《菊子遊戯之図》が、わが国の美術センターといってよい上野の山にデビューすることになった。皆様、その頃上京する方は是非「ユニヴァーシティ・ミュージアム・エクスポ」に顔を出して《菊子》さんの晴れ姿を拝んで来て頂きたい。ちなみにその前に学内で予行演習のような展覧会を開催するので、そちらもよろしく。

もう一言つき合って頂きたい。附属博物館は、山形大学が市民と交流する貴重なパイプの一つになっていると自負している。知的好奇心旺盛な市民が、さまざまな調査にいらっしゃることが少なくないのだ。そこで、本号では、そのような市民の方からときどき歴史資料を調べにいらっしゃる森谷さんにエッセイを書いて頂くことにした。快くお引き受け頂いた森谷さんに感謝申し上げる。



博物館雑感

森　谷　圓　人（教育学部昭45年3月卒）

昨年の12月から今年の1月にかけて十数日間、附属博物館所蔵の近世文書「三浦文庫」の調査・写真採録をさせていただきました。博物館と直接お世話くださった職員の高橋さん・軽部さんにお礼を申し上げます。ところが、高橋さんから部外者執筆としては初めての原稿依頼をされてしまいました。学生時代から30年以上顔を出してお世話になっており、お受けすることにしました。依頼内容は「なんでもいい」ということでしたが、今回の調査そのものから感じたこと、博物館の雰囲気から感じたことを記させていただきます。

博物館所蔵近世文書の大きな特色の一つが「三浦文庫」であり、文庫の由来の素晴らしさについては周知のことですが、あらためて二つの優れた点を発見することが出来ました。一つは私の研究テーマ「近世後期の地域社会」の観点から検討してみると、年代不明の文書や雑文書として扱われかねない文書すら体系的に意味を持って存在していたということです。故長井政太郎先生の収集に関わる文書ですから当然といえば当然ではありますが、幅広い興味関心からの収集であるため、「雑然」と言えば雑然の感を受けていたのも事実だったからです。

二つ目は、研究テーマに沿って、私が三浦文庫文書の旧所在地域、更には関係機関所蔵の文書を調査したところ、当然山大三浦文庫には入っていない貴重な文書を見つけることが出来ました。しかし、反対に地域にも他の機関にも原文書がなく、博物館に原田氏筆写にかかる写しだけが唯一の資料となるケースも多々有ることが確認できました。史料としては少し価値が下がるとはいえ、保存・活用という立場から言えばかけがえのないものです。三浦文庫は、現時点で「収集の成立ち」を問う人もいますが、むしろ消失文書の多さを考えれば、その功は大きいといえるのでないでしょうか。

また、職員の高橋さんの話によると、博物館所蔵文書の中で、閲覧希望文書の第一位は三浦文庫だそうです。県内各地に関わる文書があり、目録が作成されているという点を考えればうなずける

ことです。ふりかえってみると、一般県民の中にも郷土の古文書に触れてみたいという願いがあります。一部研究者・郷土史家だけでなく、市町村広報誌やホームページを通して県民に古文書の所在とその特色を知らせれば、博物館と県民とを広く結ぶことになっていくのではないでしょうか。当然、博物館所蔵の他の豊富な資料、理系も含めてのことです。

このような生意気な提案をさせていただくのは、実は博物館史料の一層の充実と活用がなされることを願うためです。博物館が多数の史料を蔵し、丁寧に管理してくださり、そして閲覧に十分な便宜を図ってくださっていることを知って、資料の寄託などを考えている方もいらっしゃるのです。私や先輩達も研究の中で、そんなことを地域の方にお話し、寄託やお譲りを受けたものがあります。博物館の鮨洗村(山形市)文書、図書館蔵になっている大石田二藤部文書などは代表的例です。最近もあります。これらの文書が県内地域史の新側面を開いたことも事実です。県民と博物館を結ぶことは、もうすでに職員の皆さんのご努力で始まっています。先日、博物館に一民間人(郷土史家ではない)が先祖の道中記の刊行に当たって掲載資料面でお世話になったと、お礼と出版本の寄贈に見えておられました。子孫の方の個人史と合わせた、学術的な検討にも耐えられる立派なものでした。

博物館の毎年の特別事業は大変盛況だと聞いております。私は昨年末に開かれた考古資料展示会を参観して、単に学術的なことだけでなく、今ここにこの考古資料がある経過を淡々と記した解説文に感動しました。そこには大学の先生方と学生・先輩が一緒になって発掘し、整理し、まとめたことが書いてありました。発掘にいたるきっかけは学生がつくったものが多かったのです。私達が行った古文書の調査整理も同じでした。展示会を参観した学生の一人は「山大でも、学生自身が頑張って、新しい発見や研究をやっていたんだね」と感想を述べていました。私自身、身体を使って、先生方と一緒に学問の一端を垣間見させていただいたことに感謝しています。東北大大学院ゼミでは「地方文書なら山大博物館に行け」とよく言われます。山大現役学生の姿を博物館でもっと多く見られたらと考えてしまいました。事情をよく知らないまま書いてしまったところはお許し下さい。これからもよろしくお願いします。

博物館ボランティア
Information Desk

山形大学附属博物館（以下、本館）は、国立大学法人山形大学中期目標・中期計画の中に「大学博物館友の会」「学外ボランティア」等、地域市民との連携体制づくりに努めると掲げている。合わせて学外ボランティア体制の整備計画を平成18年度までにまとめるとの一項も。

現在、本館ではその目標の実現に向けて、既にボランティア制度を導入している国立大学法人の附属博物館等へボランティア制度の関係規則や成果の実情を問い合わせ、資料の収集に努めているところである。

山形市内でも「山形県郷土館　文翔館」と「山形県立博物館」がボランティア制度を導入。本館で毎年実施している博物館実習の日程の一日、他館見学としてその両館にお世話になっている。

そもそも今から十年以上も前、本館には存在しない収蔵庫を見学させていただくと共に、近い将来、博物館・美術館等の事業計画の中では大事な項目になるであろう思われる「ボランティア制度」というものを、学生に体験してもらいたいとの思惑があり、両館に無理を言ってお願いしたのだった。

本館が今こうしてボランティアの導入の実現に向けて頭を悩ますことになるとは、当時は思いも及ばないことであった。

山形大学の理念のひとつとしてとして「開かれた学術・教育の地域拠点の形成」が掲げられているが、ボランティア制度の導入はまさしくこの理念に沿ったものである。

これまで、学内の学生ボランティアは公に募集こそしなかったものの、毎年、館に足繁く通ってくる学生の何人かが「強制労働だ」と冗談めかしながら、展示室内の清掃やら力仕事を快く手伝っ

てくれていた。また、定員の教職員のいない本館にとって、種々の事業を展開していく上で学内教員の協力は、まさしくボランティア精神以外のなにものでもない。

しかし「学外ボランティア」となると、これまでのように「ちょっとお願い」「ありがとうございました」で片づけられるものではなく、円滑な活動の裏付けとなる規則と「ボランティアの方々にどのような仕事を分担していただくのか」という明確なビジョンが必要となってくるだろう。

ボランティアの方々が集う部屋もなく、資料で溢れかえる展示室の本館が、「ボランティア体制の整備」などはおこがましいのかもしれないが、決して実現のあてもない目標を掲げていたわけではないことを記しておきたい。

本館には、幸いにも長年にわたり、所蔵する各分野の資料を愛でて通ってこられる多くの方々がいらっしゃる。勉強不足の館員は、「長年のおつき合い」という縁に甘え、所蔵資料に関する自分の疑問などを質問したりすると、答えに導いてくださるだけではなく、「何かお役にたてることがあればなんなりと」「私でお手伝いできることなら遠慮なく」というお言葉をいただくことが幾度となくあった。

昨年末の大掃除の際、館員の要領の悪さに同情されたのか、資料の閲覧にいらしていた方が、「これこそ得意分野でのボランティア」と笑いながら展示ケースのガラス磨き等に半日近く参加してくださった。

ボランティアが「無償の奉仕」であると言うならば、本館は何十年とそういう方々に助けられ育てられてきたのではないだろうか。

学内外の多くの方々のさりげない無償の奉仕によって時を重ねてきた本館こそは、「ボランティア精神」の申し子だったのかもしれない。

これまで記録に残ることもなく、表にでることもなかったそれらの「恩恵」が、「体制の整備」が整うことで今後の館の歴史に残るのであればそれに越したことはない。そして、これを機会に地域の方々との連携がより深まり、「博物館からの情報発信」をこれまで以上活発にしていくことが館の願いでもある。

この館報の次号が発行されるころには「体制の整備」もだいぶ具体化しているはず。本館が目指そうとしているボランティア制度は、館の雑用担当や館員の手伝いではなく、地域の方々の培ってきた知識や技能を活かし、山形大学がそして大学の博物館が学術・教育の拠点となるための一翼を担っていただこうと考えている。

「大学の博物館ってどんなとこ？」「自分の得意な分野を活かしながら大学に足を運んでみようか」という方々、是非博物館にご一報を。

（附属博物館　高橋加津美）

資料紹介

藁沓

藁沓

今冬は例年にない大雪に見舞われ、朝夕と雪かきに精を出す人々の姿が目に付く。降った雪が溶ける間もなく、どんどん降り積もっていくといった調子で12月にはすでに1、2月並の雪量だった。道を歩く人も皆、頭のてっぺんから爪先まですっかり冬装束だ。私たちの祖先は、凍えるような寒さと雪の冷たさの中で活動するために、様々な道具や衣装を作り出してきた。当館が所蔵する藁沓（わらぐつ）もその一つである。

藁沓（わらぐつ）は稲藁を編んで作るもので、足をのせる台に甲を覆う部分を装着した履物の総称である。主に積雪の多い東北、北陸地方で使用されたが中国、四国、九州地方でもわずかに使用されていた。材料である藁はそもそも稲の副産物であるが、稲を根元から刈り取る根刈り収穫法が日本で行なわれるようになったのは7、8世紀頃と言われている。11世紀初頭には籾を汲落す脱穀法が採られていた

というから、藁もその頃から使用され始めたのだろう。藁はそのままの形で燃料、試料、肥料、敷き藁として用いる事ができる他、生活用具作りに利用された。衣・食・住、全ての面で藁は日本人の生活を支えてきたのである。今でこそ私たちは厚手のコートやジャンパーを羽織り、足元は長靴やブーツで完全防備で寒さに備えるが、それまで人々に暖を与えてくれたのは藁であった。

藁沓が履かれるようになったのはいつ頃からだろうか。平安時代に書かれた『雅亮装束抄』や『飾抄』などの文献資料にはすでに「藁深沓」の語があり、上皇が雪見や春日祭の時に履いたという記録があるという。藁沓の作り方の基本は草履や草鞋と一緒で、始めに底の部分を作り、次に爪先、踵、筒の順に作られる。藁沓といっても台部や被甲部の構造、踵部、脛部の有無、着装装置の違いで①爪掛類、②クツ類（スリッパ様）、③浅沓類、④深沓類に分類される。

① 爪掛類　台部は草鞋と全く同じで台、乳、紐、カエシの部分からなる。それに被甲部を作りつけたもの。草鞋と同様に紐を結んで着用する。

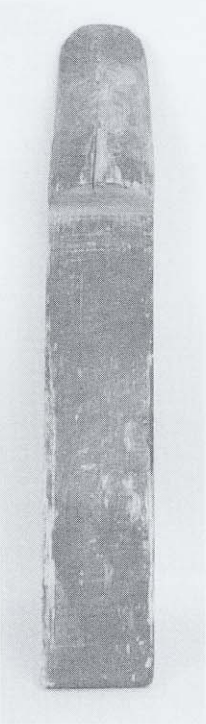
② クツ類　台部に被甲部を装着しただけのもの。スリッパのようなもので、台の部分をそのまま折り返して被甲部を作ったものや、草履に爪掛を作りつけたものなどがある。

③ 浅沓類　クツ類に踵当を作りつけたもの。道を歩く際に滑りにくく、暖かい。

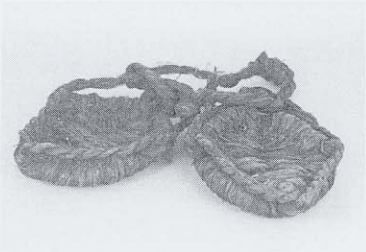
④ 深沓類　浅沓に藁脛巾を結合し、膝まで筒形に編んだもの。雪中の歩行に使用されるのがほとんどだが、味噌踏みや麹作りなどにも使用された。

本館は①～④にあたる全ての藁沓を所蔵している。こうしてみると、材料も技術も発展している現代より、その時々に適した履物が使い分けられていることに驚く。①、②に分類されるツマゴワラジは雪の降り始めの頃、近所に出掛ける時などに履かれた。本格的に雪が積もる頃になると履かれた④にあたるフカグツは平地では半月から一ヶ月、山では五日くらいもつという。山仕事の際は雪に足をとられないようカンジキにとりつけて履かれた。補強のため切れやすい乳（草鞋の縁に紐を通すために付けた小さな輪）や爪先、踵には布を一所に編み込んだり、丈夫な網代編み（脛の部分は俵編み）にする等の工夫がされることもあった。本館が所蔵するフカグツも爪先と踵の部分に紐が一所に編みこまれている。また藁沓は水に弱い。水分が沓の中に染みにくいように油紙や笹の葉を底に敷く等、その土地土地で工夫がなされた。使用後は長時間水気にさらされると藁が腐ってしまうため、すぐに囲炉裏の側で乾かす必要があった。手に入りやすい藁が材料で、決して高価なものではないが大切に使用されたのである。私の祖父も藁沓を履いた世代だ。学校を卒業した15、16歳の頃から冬仕事として草鞋や草履、フカグツを作った。足袋を履いてからフカグツを履き、ぴったり足にフィットとはいかないが、暖かく、また雪道で滑ることはなかったという。フカグツは長靴やブーツよりも安全に歩行することができたのだ。また別の人は長靴が出回り始めてからも、長靴の底に藁を敷くと暖かかったと話す。

本館には藁沓の他に草鞋や藁沓の甲の部分を作る際に用いたじんべい型、雪道で滑らないように馬に履かせた馬靴等も展示されている。



じんべえ型



馬　靴

参考文献
・潮田鉄雄『はきもの』（ものと人間の文化史8）法政大学出版局、1987年
・宮崎　清『藁（わら）Ⅰ』（ものと人間の文化史55-Ⅰ）法政大学出版局、1986年
・宮本馨太郎『かぶりもの・きもの・はきもの』（民俗民芸双書24）岩崎美術社、1968年

（附属博物館　軽部早苗）

平成17年度事業報告

平成17年度に本館で実施した博物館実習の単位習得者数は下記のとおり。

（単位：人）

学　部	人　数
人文学部	43
地域教育文化学部	29
理学部	37
計	109

公開講座は「科学の創造、芸術の発明」をテーマに、工学部キャンパス（米沢市）を会場に開講された。**講師・演題**は下記のとおり。

第1回	10月1日（土）	1コマ　各90分
・新たな眼底断層画像診断装置 －ＯＣＴの発明－ 山形大学　助教授　市村　勉		
・写真発明秘話：ニエプスとイメージの起源 山形大学　教授　阿部宏慈		
第2回	10月8日（土）	1コマ　各90分
・コンピュータによる写真織りの技術 ㈱織元山口代表取締役　山口英夫		
・風景画の発明 山形大学　教授　元木幸一		
第3回	10月15日（土）	1コマ　各90分
・有機ＥＬ開発物語 山形大学　教授　城戸淳二		
・芸術を科学の力で未来へ ～文化財保存科学の世界 東北芸術工科大学　教授　松田泰典		

特別展は、平成17年11月7日から19日まで（12, 13日は休館）の10日間、**「土よりいでしものたち」**と題し、県指定有形文化財の考古資料を中心に、インフォメーションセンターを会場に開催した。なお、特別展最終日には、特別展にかかる公開講演会が無料で開催され、学内外の聴講者で賑わった。

博物館で実施した事業の詳細については、博物館のホームページで随時お知らせしています。

平成16年度見学者総数

一般成人	個人	546人
	団体	186
大学生	個人	1,645
	団体	555
児童・生徒	個人	436
	団体	226
合計	個人	2,627
	団体	967
	総数	3,594

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。
お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報　No.32　2006.3発行
編集兼発行人　山形大学附属博物館
〒990－8560　山形市小白川町一丁目4－12
（ＴＥＬ）023（628）4930（直通）
（ＦＡＸ）023（628）4930
http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/